・高低差 750mm では，触る行為が多く生起する．
・高低差 1000mm では，腰をかける行為や触る行為が多く生起する．

○面積

・1unit（250mm × 250mm）では，腰をかけるとまたがる行為はどの高さでも生起し，頻度も高い．そのため，1unit の面積が腰をかける行為を生起しやすい面積であるといえる．
・4unit（500mm × 500mm）では，あぐら・四つん這い・正座といった姿勢をとる．これらの座位姿勢には 4unit 程度の面積が必要であることがいえる．

D：提案生活具と日常生活具との子どもたちによる使われ方の比較

・こどものもりの部屋・コーナーでは空間ごとの活動種別が決められているため，そのコーナーに設置されてある日常生活具は予め決められた使われ方をしている．
・提案生活具に腰をかける場面や台・階段に見立てる場面などを観察することができた．
・提案生活具においては日常生活具のように用途が限定されていないため，同じ寸法の日常生活具では生起しない多様な行為が生起する．例えば，日常生活具では，250mm の高さのいすに腰をかける行為や 500mm の高さのテーブルにモノ置く行為等が生起しているが，提案生活具では前述の行為の他に，250mm や 500mm の高さの上に立って，高さを比較・競争して楽しむ場面や子どもたちが利用する日常生活具の中では少ない 750mm や 1000mm の高さを，提案生活具を組み合わせることによって作り出し，その上に立つ，腰をかけるなど高いところを好む様子などが観察された．

G. 研究発表

1．論文発表

本研究は，加筆・修正の上，日本建築学会技術報告集への投稿を予定している．

2．学会発表

本研究は，第一回こどもの「環境と空間」研究会，2008 年 3 月 13 日　において口頭発表された．

また，本研究の一部は日本建築学会大会にて発表予定である．

付録

・新 JIS 規格（2004 年改正）　学校用家具—教室用机・いす

1．机の寸法　　単位mm

		0号	1号	2号	3号	4号	5号	6号
身長		900	1050	1200	1350	1500	1650	1800
机面の高さ		400	480	520	580	640	700	760
机面の奥行き		450,500						
机面の幅	一人用	600,650,700,750						
	二人用	1200 , 1300						

2．椅子の寸法　　単位mm

	0号	1号	2号	3号	4号	5号	6号
身長	900	1050	1200	1350	1500	1650	1800
座面の高さ	220	260	300	340	380	420	460
座面の有効奥行き	–	260	290	330	360	380	400
座面の最小幅	–	250	270	290	320	340	360
座面の角度	–	0～4°					

謝辞

本研究全般にわたり，調査方法や分析方法などから論文を書き終えるまで，終始有益な御指導ならびに貴重な御意見で御教授頂きました佐野友紀先生に深く感謝し，御礼を申し上げます．また，研究を進める上で御指導・御助言を頂きました佐藤将之先生に心から感謝致します．

そして本研究を行うにあたり，お忙しい中調査を引き受けて下さった園の園長先生，園のスタッフの方々に厚く御礼を申し上げるとともに，調査員として調査に御協力頂いた方々に感謝致します．

■参考文献

（1）小原二郎編 『デザイナーのための 人体・動作寸法図集』，彰国社，1985年
（2）久世妙子・内藤徹・内田照彦編 『現代の子ども 児童学・保育学を学ぶ』，福村出版，1994年
（3）建築思潮研究所編 『建築設計資料 91保育園・幼稚園3 子育て支援の中核』，建築資料研究社，2003年
（4）佐藤将之 「こどもたちの関係と空間を分析するための記述法 ～子どもの環境原論 その1～」『日本建築学会学術講演梗概集』 E-1分冊 2004年，963-964頁
（5）仙田満 『あそび環境のデザイン』 鹿島出版会，1987年
（6）高橋鷹志＋チームEBS編著 『環境行動のデータファイル 空間デザインのための道具箱』 彰国社，2003年
（7）日本建築学会編 『建築設計資料集成—人間』 丸善株式会社，2003年，13頁・16頁・20頁
（8）日本建築学会編 『コンパクト建築設計資料集成＜住居＞』 丸善株式会社，2006年，175頁
（9）前田正子 『子育ては，いま 変わる保育園これからの子育て』 岩波書店，2003年
（10）三輪弘道編 『発達と教育2 幼児の心理と保育』 福村出版，1983年
（11）横山勝樹 「幼稚園家具の現状に関する調査研究について」『季刊 文教施設19』，夏号 2005年，43頁～47頁
（12）ロジェ・カイヨワ 『遊びと人間』 講談社，1990年
（13）渡辺秀俊 「寄りかかりをアフォードする高さ寸法 身体を支持する環境の動きに関する研究（その1）」『日本建築学会学術講演梗概集』 E-1分冊 1998年，737-738頁
（14）『JIS S 1021 学校用家具—教室用机・いす』 日本規格協会，2004年

■後注

（1）久世・内藤・内田 92-96頁
（2）建築思潮研究所，192・193頁を参考
（3）日本建築学会編 『建築設計資料集成—人間』，20頁 および建築思潮研究所，8頁を参考
（4）『JIS S 1021 学校用家具—教室用机・いす』 日本規格協会，2004年，24頁
（5）小原，8-15頁
（6）日本建築学会編 『コンパクト建築設計資料集成＜住居＞』，175頁
（7）渡辺秀俊 「寄りかかりをアフォードする高さ寸法 身体を支持する環境の動きに関する研究（その1）」『日本建築学会学術講演梗概集』，E-1分冊 1998年，737-738頁
（8）日本建築学会編 『建築設計資料集成—人間』，16・20頁
（9）高橋鷹志＋チームEBS，15頁
（10）ロジェ・カイヨワ 『遊びと人間』を参考
（11）仙田，9-15頁
（12）佐藤将之 「こどもたちの関係と空間を分析するための記述法 ～子どもの環境原論 その1 ～」『日本建築学会学術講演梗概集』 E-1分冊 2004年，963頁

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））
総括研究報告書

幼保一体型施設における年齢に応じた環境行動に関する考察

主任研究者：猿渡　多聞（早稲田大学 人間科学部 人間環境学科　学部４年）
研究協力者：佐藤　将之（日本大学生産工学部建築工学科　非常勤講師）

本研究では、幼保一体型施設において、保育形式の異なる２園の子どもの行動（３～５歳児）と、それに対して環境が与えている影響を調査した。

本研究により、与えられる環境の違いがとりわけ３歳児の活動量や体験する遊びに影響をもたらしていることが確認された。またそれに伴い４、５歳児が構築する人間関係も同年齢同士の関係だけで一日を過ごすのか、同年齢同士の関係の中に異年齢との関係も含まれる中で一日を過ごすのかなど、異なったものとなっていることがわかった。また、そのような保育施設において活動が活発になるとケガをする恐れが常にあるが、そのケガをすることに対する親や保育施設のスタッフの考え方も整理した。

A．研究の背景と目的

A．１　背景

これまで、幼稚園は学校教育法で定められた就学前教育施設として、保育所は児童福祉法による保育に欠ける乳児又は幼児を保育する施設として機能してきた。管轄もそれぞれ文部科学省と厚生労働省となっている。その中で近年、少子化による幼稚園での空き教室の増加や保育所待機児童の増加がクローズアップされるようになってきた。また、親のニーズも変化しており、保育所に通わせているが幼稚園のような教育を受けさせたい、あるいは、幼稚園に通わせながらフルタイムで働きたい、といったような希望をする親が増えている。このような社会状況の中で、幼稚園と保育所が一体的に運営されることが見られている。そのような施設の総数は約３００施設といわれている。（２００６年３月２３日現在）また、２００６年１０月からは認定子ども園に関する法律が施行された。「認定子ども園」では就学前の子どもに、保育、教育、子育て支援を一体的に提供する施設としての役割が求められている。その結果、子どもの保育施設における滞在時間や受ける保育プログラムはさらに多様化し、混沌とした状態となっている。このような理由により、幼保一体型施設における子どもの生活についての関心が高まっている。また与えられた環境や保育プログラムの違いにより、子どもの行動にどのような影響が見られるのかということを明らかにしていく必要がある。

A．２ 既存研究

既存研究には以下の研究がある。

● 幼保一体化施設における保育に関する研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（星、角藤、清水 2005）

幼保一体型施設の運営やシステムに関してまとめられている。

● 幼保一体型施設の運営実態から見た建築計画に関する研究（樋沼、山田、2005）

幼保一体型施設が運営形態のや一体化の経緯の別にまとめられ、それらが園児の活動や体験するプログラムにどのように影響を与えているか調査されている。

● 幼稚園における異学年交流の場に関する研究（藤田 2001）

幼稚園において異学年交流がどの時間帯に起こるか、どのような場で起こるかが調査されている。

● 園児の社会性獲得と空間との相互作用に関する研究～子どもの環境行動言論～（佐藤、2004）

園児が人間関係を築いていくにあたって空間が与える影響やどのように子どもたちの交流が始まるのかが調

査されている。

このような既存研究をふまえ、本研究では幼保一体型施設において、保育形態の違いに伴い子どもに与える環境がどのように異なるのか、また、年齢や発達に応じた環境をどのように設定しているのかを明らかにする。

A．3　研究目的

幼稚園と保育所という当初の目的を異とする両者が一体となったことで、それらの場の質も変容していることが予想できる。そこで、本研究では、幼保一体型施設において保育所に属する子どもたちと幼稚園に属する子どもたちが共存する空間に着目し、自由な利用や保育スタッフによる誘導的な利用に関する考察を行う。

以降、年齢ごとに分けられた保育室を持つ保育形態を年齢別保育、年齢ごとに分けられた保育室を持たない保育形態を縦割り保育と呼ぶこととする。

現在、幼保一体型の施設においては、幼稚園に保育所機能が加わった幼稚園先行型や、保育所に幼稚園機能が加わった保育所先行型、それぞれが同時に一体的運営を始めた混合型があり、それぞれに異なる特徴を持っている。本研究においては年齢や発達に応じた保育・教育目標と環境との相互関係を、年齢別保育の場合と、縦割り保育の別に明らかにしようとしている。

B．研究方法

B．1　調査概要

与えられた環境の異なるこどもたちの行動を考察するために、以下の調査を行った。

● 調査対象年齢は３～５歳児とする。

● １０分ごとに各保育室にいるこどもたちの人数のカウントを行なう。

● ３０分ごとに保育室、廊下、半屋外、屋外のどこにこどもがいるかをカメラで撮影し，図面上にプロットする。

● 自由保育の時間と一斉保育の時間を調査対象とする。

● 空間に対する園児の自由な利用と、スタッフによる誘導的な利用について調査する。

B．2　調査日時、調査場所、調査園概要

● ２００６．１１．８ 東京都台東区立 Is 幼稚園

東京都台東区に位置する区立園。３歳児からの３年保育を行っている。就学前教育の充実のため、平成１５年から４歳児と５歳児は園庭を挟んで隣接する H 保育園の４歳児５歳児とそれぞれ合同保育を行っている。(図１-１、１-２)

● ２００６．１１．１５，１７ 埼玉県 Mt 幼稚園幼稚園所属の園児と保育所所属の園児が全く同じ空間で生活する、幼保一体型施設。子どもたちは年齢ごとの保育室を持たず、制作のコーナー、英語のコーナー、絵のコーナー、表現のコーナー、園庭など自由に好きなコーナーへ向かう。またそれぞれの子どもたちは年齢ごとに分けられたクラスと縦割りで分けられたコースの２つの帰属を持っている。(図１-３)

C．年齢に応じた環境に関する調査と考察

C．1　しつらえから発生する遊び ～３歳児の行動と環境～

(1) 年齢別保育における環境行動（Is 幼稚園を事例として)

３歳の保育室は園舎に入って左手すぐの、１階に位置している。(図２-１)

表２-１、図２-２を見ると１０：２５の人数カウントまでは、３歳児は保育室内にいる確率が高いことが伺える。さらにプロットデータから子どもが遊んでいる場所の数と特性をみる。そうすると、全体の５９％の遊びが机やパーテーションで囲われたような場所で、言い換えるならば、しつらえの周りで発生していることがわかった。机の周りでは本を読んだり制作をしている。囲われた場所や、それ以外のところで行われている遊びは、ほとんどが何かの役になったり、真似をして遊ぶ、いわゆる「ゴッコ遊び」である。おままごとでは制作をしたものを使って新たな状況設定がなされたり、ダンボールで作ったパーテーションのようなものを付け加えたりすることにより家を「成長」させている。(写真２-１、２-２、２-３)

このように、３歳児の保育室においては室内における家具配置などのしつらえが遊びを誘発する装置となり得ることを観察できる。１０：２５からは保育室内だけではなく、子どもたちの活動がホワイエやピロティに広がっている様子が見られる。ホワイエにおいては３歳児と４歳児が同じ空間で遊んでいる様子が見られる。ここでは先生と一緒にダンボールで玉入れ遊びの遊具を制作して、その後３歳児と４歳児が共に遊んでいた。このような年齢による活動量の差が大きく影響しないような遊びは共にすることができるのである。それでも遊びは遊具から発生しており、ある遊具の周

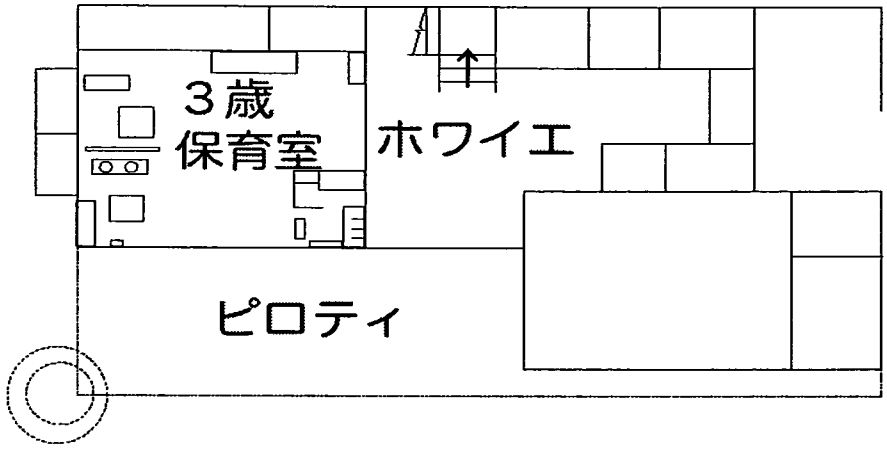


図 1-1:Is 幼稚園 1 階

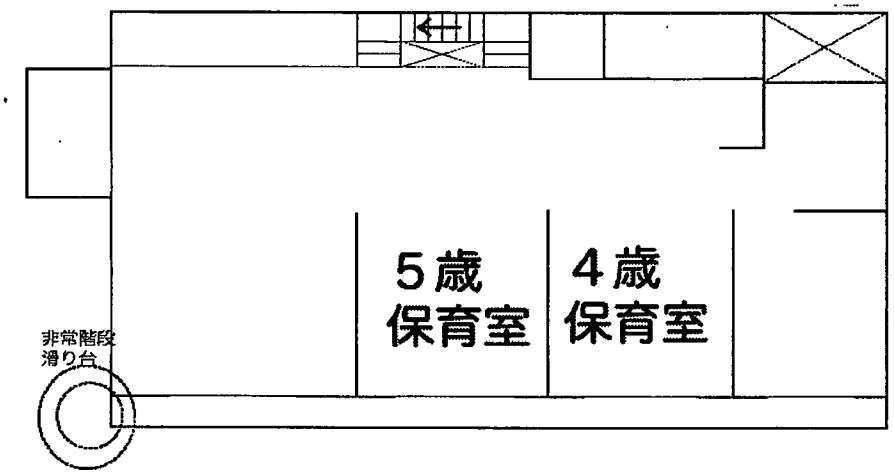


図 1-2:Is 幼稚園 2 階

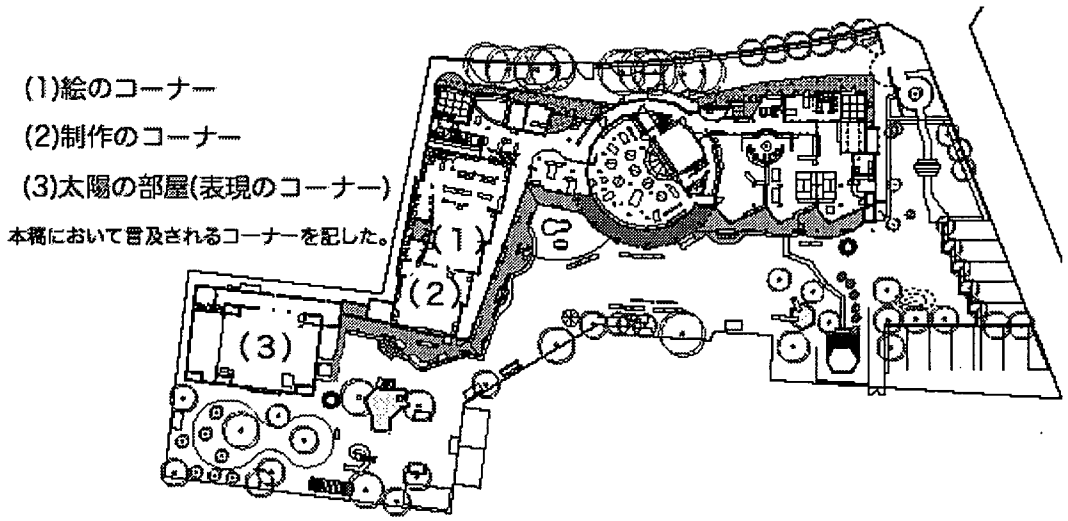


図 1-3:Mt 幼稚園

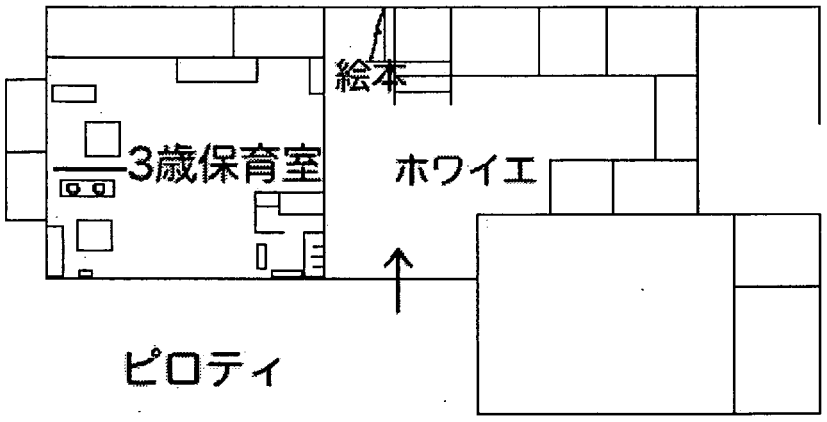


図 2-1:Is幼稚園もも組平面図

表 2-1:Is 幼稚園3歳児保育室人数推移

もも組保育室付近人数推移表（☆：スタッフ、年齢を明記していないものは3歳）

	保育室	絵本コーナー	玄関前スペース	ピロティ	3歳児が保育室内にいる割合
9：00	14☆	0	0	0	100%
9：10	8☆	0	0	0	57%
9：25	9☆	0	2	0	64%
9：30	6☆	0	2（4歳）	6（+4歳2）	42%
9：40	9（+4歳2）☆	3（4歳）	4（4歳）	0	64%
9：55	10☆	3（4歳）	8（4歳）	8（5歳）	71%
10：00	9	0	4☆（+4歳3）	0	64%
10：10	10	0	4（+4歳4）	3（4歳）	71%
10：25	4	0	2（+4歳4）	7	29%
10：30	6	2（4歳）	3（+4歳4）	4（+4歳4）☆	43%
10：40	5	3（+4歳2）	4	6（4歳）	36%
10：55	9☆	2（4歳）	5（4歳）	4（4歳）	64%
11：00	一斉保育開始				100%

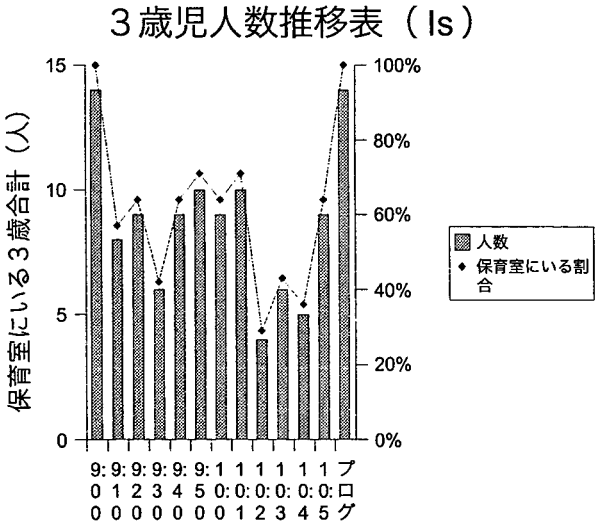


図 2-2:人数推移表

りで遊ぶという遊び方の性質を見ることができる。さらに屋外に出ると、ピロティにはちびっこハウスと名付けられた家の遊具やブロック状のキューブが設置してある。このキューブは並べてその上でおままごとなどをすることができるようなものである。3歳児がピロティで遊ぶ場合は、今回調査した中では6場面あったが、そのうち4場面がこのような遊具がおいてあるところで遊んでいた。室内と同様に、やはり何かしつらえのあるところで遊びが発生しているといえる。(写真2-4)

（2）縦割り保育における環境行動（Mt 幼稚園を事例として）

Mt 幼稚園においては、年齢ごとに決まった保育室を持っていない。そのためそれぞれのコーナーにおける該当年齢児の割合を考える。登園してきた園児たちは着替えをすませたのち、まず絵のコーナーで絵を描くことになっている。絵を描き終わると、各コーナーでの遊びへ向かう。各コーナーの3歳児の人数の合計と全3歳児のうち屋内にいる3歳児が占める割合をグラフにした。(図2-3)

年齢別保育と比べると、3歳児が保育室にいる割合が大きく異なることがわかる。このことから縦割り保育においては3歳児の活動が活発化されていることが伺える。絵のコーナーにおいて園児が絵を描き始めて

から描き終えるまでを１場面とすると、調査日においては８場面観察された。その中で７場面が４歳または５歳の園児と同じ机で絵を描いている。それぞれがお互いに干渉せず絵を描いているのだが、同じ机で絵を描いていることがきっかけとなって、描き終えると異年齢であっても絵の見せ合いをしたり、一緒に○○にいこうと誘ってコミュニケーションがうまれている。（写真２-５）この場合、制作のコーナーへ向かったり、園庭に向かう行動が見られる。さらに、たまたま３歳児がかたまって座った場合その後は３歳児同士で行動

写真 2-1:家を作り始める

写真 2-2:だんだん発展していく

写真 2-3:自分たちの空間が出来上がる

写真 2-4:遊具から遊び発生

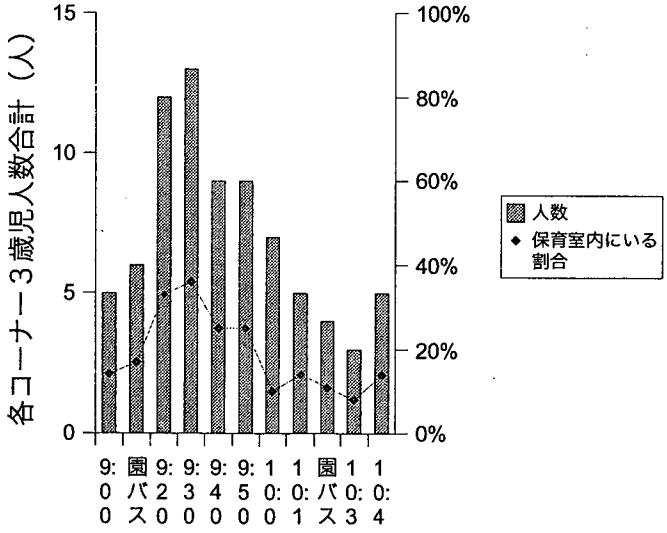


図 2-3:人数推移表

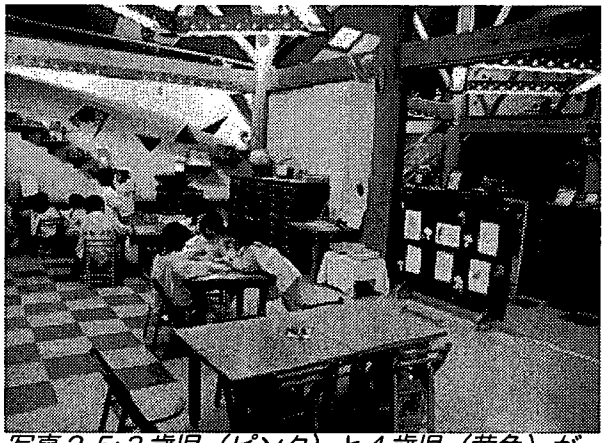


写真 2-5:３歳児（ピンク）と４歳児（黄色）が同じ机で絵を描く。３歳児は４歳児の絵をのぞき込んでいる。

することが見られる。そのようなケースの場合は、屋内のコーナーや半屋外に設置してあるしつらえの周辺で遊ぶことが見られた。(写真2-6、2-7)

このことから、3歳児は4歳児、5歳児と共に活動をしていたり誘われたりするとそのままついていくが、そのような声がかからない場合は同じ年齢同士で活動することがわかった。3歳児が自分から4、5歳児を誘うという姿は見られなかった。このことは3歳児の活動を促進するために異年齢交流のできる空間を考える場合、3歳児の保育室や3歳児のいる場所を、4歳児や5歳児の方からアクセスしやすい場所に配置する必要があることを示している。

では園庭に出た時にはどのような遊びをしているのだろうか。4、5歳児につれられて園庭に出た場合、鉄棒やなわとびなど3歳児だけでは遊ぶことが難しい遊びをしている。一方、3歳児のみで園庭にいる場合、ベンチに座っていたり、園庭においてある机で絵を描いたり制作をしていることがわかった。

このようなことから、3歳児は屋内でも屋外でも3歳児だけで活動する時にはしつらえが大きな意味を持ち、遊びはしつらえを中心として発生することがわかる。さらに異年齢との交流によって屋外に共に行き4、5歳児の遊びを真似したり、教えられたりしていることがわかる。

C．3　遊びの空間的移行 ～5歳児の行動と環境～

(1) 年齢別保育における環境行動

5歳児の保育室は2階の4歳児の保育室の隣りに位置している。(図4-1) この保育室は4歳児の保育室と正反対の特徴を備えており、床から天井までの壁で囲われた空間となっている。また、4歳児の保育室と比べると、入り口も狭くなっている。(写真4-1)

5歳児の保育室を見ると、3、4歳児とは明らかに異なる点がある。それは、3、4歳児の保育室においては床座が中心であったが5歳児保育室になると椅子座が中心となることである。4歳児の保育室にも椅子はあるが、使用している人数や場所は5歳の方が多い。このことは、4歳児保育室においては観察した中で最大2脚の椅子が使われていたが、5歳児保育室においては最大10脚の椅子が使われていることからも明らかである。(写真4-3、4-4) これは小学校に入ると教室の中では常に椅子座になるため、その環境に慣れさせておくというねらいが考えられる。床座の時はすぐに寝転がったり、どこでも自由に座り込んで作業ができるという特徴があるが、その自由度が椅子座になると低くなる。その姿勢に慣れていると、小学校で役に立つ落ち着きを身につけることができる。

遊びでは保育室内では制作や、ピアニカの演奏が人気の遊びであった。制作ではそれぞれが思い思いの制作をしているのだが、その中で、友達に何を作ったのか尋ねたり、人の作っている物を覗き込んでみたりとコミュニケーションがうまれていた。それぞれが勝手に好きなものを作って自分だけで遊ぶというよりも、人の作ったものに合わせて自分も似たようなものを作って、一緒に遊ぶというような行動も見られた。この5歳児の保育室には机が2台並べられている。(写真4-5) 制作からコミュニケーションがうまれていることを考えると、このように制作の場所を広くとることは理にかなっている。

また、表4-1、図4-2を見ると5歳児も保育室にとどまるのではなく保育室の外で活動していることがわかる。しかし、他の年齢の保育室付近の人数推移表と比べると4歳児はいたるところに出現しているのに対して、5歳児はほとんど登場しない。これは5歳児が建物の屋内よりも、園庭などの屋外に出ているから

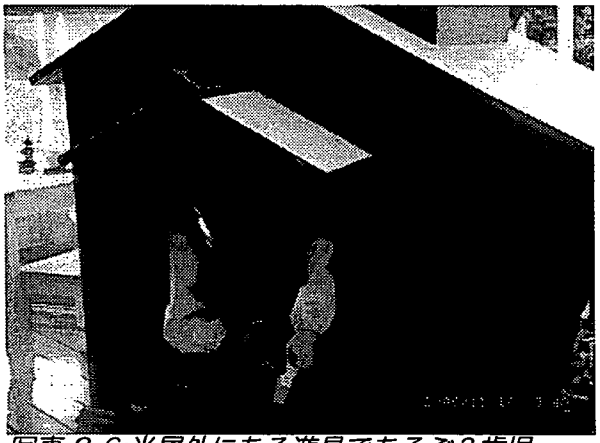


写真 2-6:半屋外にある遊具であそぶ3歳児

写真 2-7:半屋外の囲いの中で遊ぶ3歳児

C．２　遊ぶ道具を作り出す遊び ～４歳児の行動と環境～

（１）年齢別保育における環境行動（Is 幼稚園を事例として）

４歳児保育室は２階に設置されている。（図３- １）この園の４歳保育室は部屋に入るための扉を設けておらず、廊下と保育室とは床から天井までの壁やガラスではなく、高さが約１３００ mm のロッカーで区切っている。そのため保育室と廊下との空間的な連続性が保たれ、出入りがしやすく、活動的な４歳の行動に適した保育室となっている。（写真３- １、３- ２）

このような保育室になっていることには、活動のしやすさに加えて、５歳児の活動が見やすいという利点がある。そのようにして一カ所にとどまらない活動を促進することにより、異年齢との交流もすることができ、子どものコミュニケーション能力向上や自身の興味を広げていくことに役立つ。実際、保育室の人数推移を見ると、４歳児が多くの時間を自分の保育室以外の場所で過ごしていることが伺える。（表３- １、図３- ２）他の場所の人数推移表と比べると、園庭などの思い切り走れるところに４歳児が出向いていることがわかる。さらに保育室前の廊下は隣りの部屋に５歳児もいるにも関わらず、４歳のみがその場所で遊びを展開している。このことは、４歳児がこの廊下も保育室の延長と捉えているからであろう。この保育室の開放性が空間の外部との連続性を高め、４歳児が空間広く捉え、活動を活発にすることに寄与している。

遊び方を見ると、保育室ではおままごとと制作に終始していた。おままごとには男の子も混じりほとんどメンバーを替えることなく９：１０頃から１０：３０頃まで続けられた。このおままごとでは、制作で作った「料理」を持ってきたり、洗濯する様子をまねて洗濯ごっこをしたりしていた。３歳児のように領域を広げることはせず、それよりも遊びの内容がより現実的になっている印象をうける。またこの場所では、おままごとに限らず、同じ場で違う遊びがなされているこ

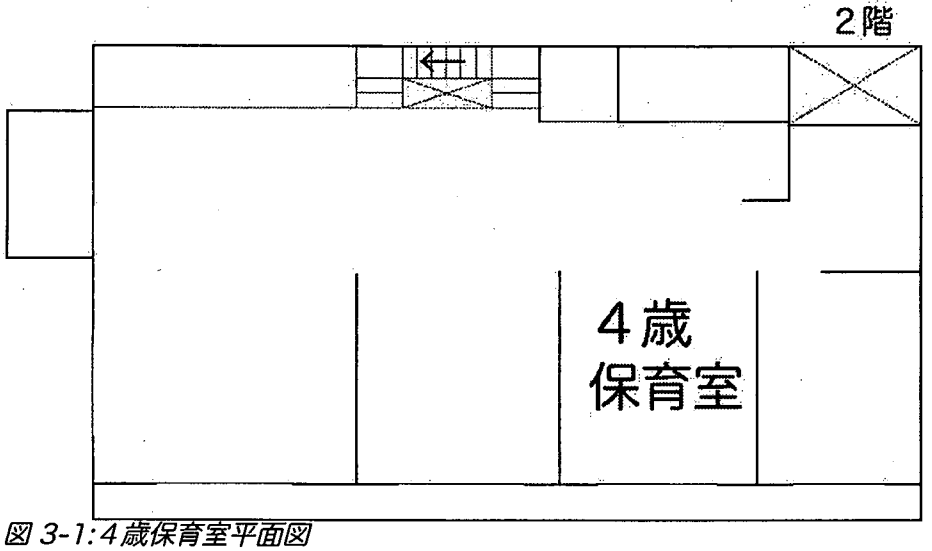


図 3-1:4歳保育室平面図

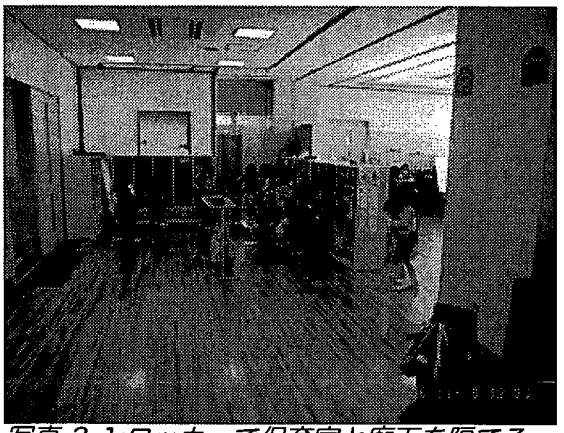


写真 3-1:ロッカーで保育室と廊下を隔てる

写真 3-2:アクセスしやすい

ともあり、場面が流作で作った棒を持って、保育室の真ん中あたりや一階のホワイエや階段でチャンバラなどをやる姿も見られた。一階のホワイエにはマットを敷いて４人で転がって遊んでいる子どもたちもいた。一方、４歳の保育室前の廊下では１０時過ぎから３人の男の子たちが積み木を積み始め、一つの遊具を作り上げた。この遊具が１０：４５には１１人の４歳児が集まる大人気スポットとなったのである。

このようなことから４歳児の特徴として、場面の意味付けを設定しないでおくと子どもたちは自分たちで意味付けを行い、遊びを始めることがわかる。さらに遊具に関しても、遊具と遊具を組み合わせたり、使い方を変えたり、あるいはゼロから作り出すことにより遊びを発生させている。ここから次のような図式を見ることができる。まず新たな遊具を作りあげる材料となるものを与えたら、そこで発生した遊びができるようなスペ-スを確保し、スタッフが安全面でその遊びをサポートするという図式である。

スタッフが誘導した空間の使い方として、５歳児と外でゲームを行っていた。ここでは思い切り走ることもできる。遊具などのモノとは関係なく、遊びをしていくことができるのもこの年齢の特徴といえる。しかし、このようにほぼ園の全ての場所に顔を出す４歳児たちだが、一度３歳の保育室におもちゃを取りにいった以外は、他の年齢の保育室の中に入って遊ぶことは見られなかった。他の年齢の保育室に入るのはやはり少し気が引けるのであろうか。

全ての年齢との共用スペースでも、スタッフが誘導的に年齢を混ぜた集団を作らない限りは、同じ集団や場に異年齢の子どもがいても、各年齢ごとに分かれて遊んでいることが観察された。しかし、園庭の砂場においては５歳児と共に遊ぶ姿が見られた。これは砂場という場所の特殊性に原因があるものと考えられる。砂場で遊びたければ砂場へ行くしかない。このような最初から場や空間の意味付けが明確な場所では異年齢での交流が起こる可能性があることがわかる。

４歳児の活動量の多さから考えると、４歳児が興味を広げコミュニケーションや活動の能力をのばすため

表 3-1:ほし組保育室人数推移表

ほし組保育室人数推移表（☆：スタッフ、年齢を明記していないものは４歳児）

	保育室	保育室前廊下	4歳児が保育室にいる割合
9：00	2☆	5	5%
9：10	14☆	5	41%
9：25	17☆	0	50%
9：30	10☆	4	29%
9：40	11☆	0	32%
9：55	6	1（+5歳1）	18%
10：00	6	0	18%
10：10	10	4☆	29%
10：25	9	4☆	26%
10：30	10☆	4☆	29%
10：40	1	8☆☆	3%
10：55	0	11☆	0%
11：00	7	14☆	21%
11：10	一斉保育	0	100%

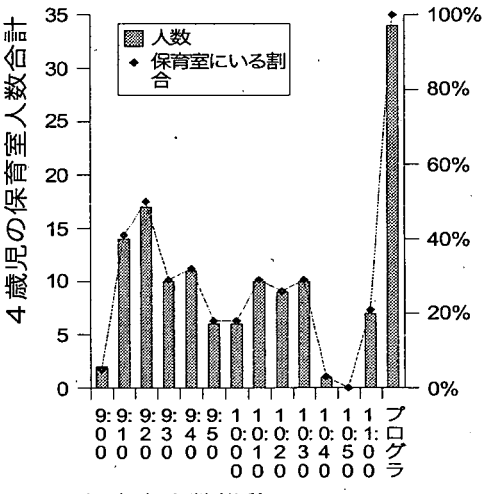


図 3-2:保育室人数推移

写真 3-3:積み木の遊具完成

写真 3-4:後に大人気になる

には設計者には次のような考え方が必要である。つまり、自分たちで遊びを作り上げることができる、遊び方が限定されないような空間を提供することが必要である。それとともに５歳児から学んだり、３歳児に手本をみせられるような異年齢の子どもたちと接することのできる空間を提供する必要がある。そのような空間にはどういう遊びをする場所なのかという意味付けをはっきりさせておくと、異年齢間での交流を促進していくことができる。

（２）縦割り保育における環境行動（Mt 幼稚園を事例として）

屋内の各コーナーにおける４歳児の人数の合計と４歳児全体のうち屋内にいる４歳児の占める割合をグラフにした（図3-3、3-4）

図３- ３からMt 幼稚園においても４歳児が保育室内での活動よりも屋外で活動をしていることがわかる。またIs 幼稚園と比較しても保育室内にいる４歳児の割合は大きく違うところはなく、保育形態のの違いによる行動の差は見られない。（図３- ４）

しかし、Mt 幼稚園では４歳児が異年齢と共に活動している姿を頻繁に観察できる。屋内のどこのコーナーで４歳児が異年齢と交流しているのかを次のグラフから読み取ることができる。（図３- ５、３- ６）

図３- ５から太陽の部屋においては４歳児と３歳児の占める割合が高いことがわかる。このことから太陽の部屋において４歳児は３歳児と交流していることがわかる。太陽の部屋には、お店屋さんごっこのコーナーやおままごとのコーナーがあり、舞台にある積み木で

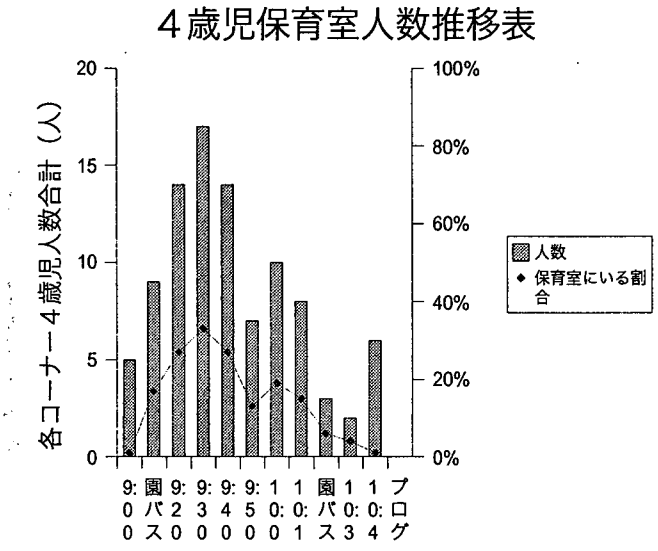


図 3-3:Mt園４歳児が保育室にいる割合

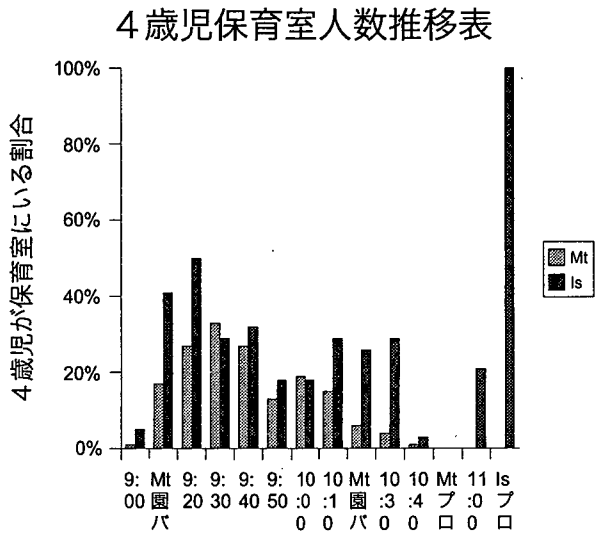


図 3-4:Mt幼稚園、Is幼稚園の比較

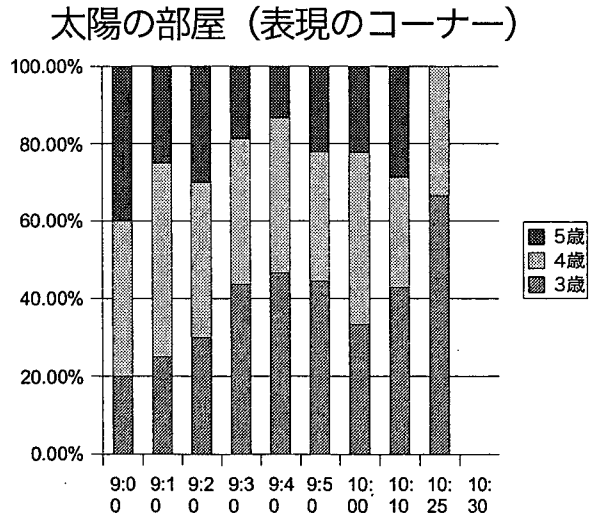


図 3-5-:太陽の部屋において４歳児は３歳児と交流する

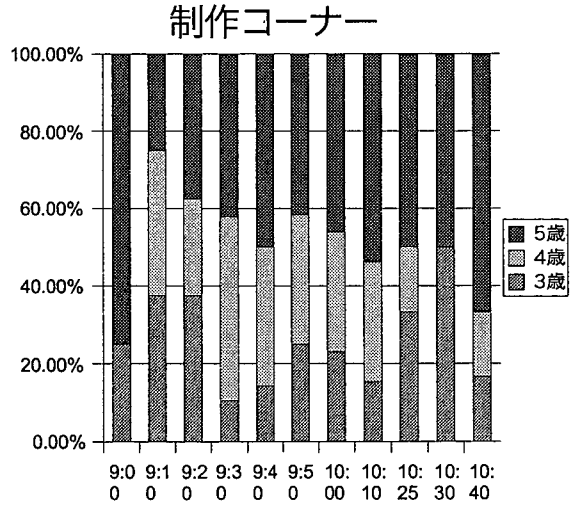


図 3-6:制作のコーナーにおいて４歳児は５歳児と交流する

写真 3-5:3歳児（ピンク）とおままごとをする4歳児（黄色）

写真 3-6:3歳児の手をひいて連れて行く

写真 3-7:制作したもので5歳児（青）と遊ぶ

写真 3-8:制作の途中に会話が始まる

写真 3-9:料理のコーナーの4歳児

遊具を作り出すこともできる。3歳児とは特にお店のコーナーやおままごとのコーナーで共に遊んでいる。(写真3-5）このような意味付けが明確である場所においては、活動量の差が影響しないような遊びを共に行なうことができるので異年齢の交流が発生するのに適した環境である。そしてこのような交流が起こることにより、3歳を誘って共に屋外に行くような行動も見られた。3歳の活動量を活発化させることにも貢献していることがわかる。(写真3-6）

図3-6をみると制作のコーナーには4歳児と5歳児の占める割合が多い。制作のコーナーでは5歳児と交流していることがわかる。ここでは作ったもので共に遊んだり、どちらが強いかを競い合ったりしている。さらに制作をしながらおしゃべりをしていることも見られ、コミュニケーションがうまれている。4歳児と5歳児では活動量が大きく変わらないので、このような交流が起こった後、共に屋外へ出て行って遊ぶことが観察された。5歳児と交流することにより、より活発な行動を促進することができるのである。(写真3-7、3-8）

4歳児に人気のあるコーナーとして料理のコーナーがある。実際に包丁を持ち、簡単な調理をすることができるコーナーである。(写真3-9）調理をするという行為を考えると、それはIs 幼稚園において4歳児が積み木で新たな遊具を作りあげることと本質的に同じ遊びであるといえる。調理も既存のもの（材料）を使っ

て新たな別のもの（料理）を作り出すという行為だからである。

このことから、保育形態に関わらず、既にあるものを組み合わせたり形を変えることにより新たなものを作り出すような遊びを４歳児が行なうことがわかる。４歳児の保育室を計画する時にはそのような遊びを行なえるような材料とそのスペースが必要であることがわかる。

2-3. 遊びの空間的移行 ~5 歳児の行動と環境 ~

(1) 年齢別保育における環境行動

５歳児の保育室は２階の４歳児の保育室の隣りに位置している。(図 4-1) この保育室は４歳児の保育室と正反対の特徴を備えており、床から天井までの壁で囲われた空間となっている。また、４歳児の保育室と比べると、入り口も狭くなっている。(写真 4-1)　５歳児の保育室を見ると、3、４歳児とは明らかに異なる点がある。それは、3、４歳児の保育室においては床座が中心であったが５歳児保育室になると椅子座が中心となることである。４歳児の保育室にも椅子はあるが、使用している人数や場所は５歳の方が多い。このことは、４歳児保育室においては観察した中で最大２脚の椅子が使われていたが、５歳児保育室においては最大 10 脚の椅子が使われていることからも明らかである。(写真 4-3、4-4) これは小学校に入ると教室の中では常に椅子座になるため、その環境に慣れさせておくというねらいが考えられる。床座の時はすぐに寝転がったり、どこでも自由に座り込んで作業ができるという特徴があるが、その自由度が椅子座になる と低くなる。その姿勢に慣れていると、小学校で役に立つ落ち着きを身につけることができる。 遊びでは保育室内では制作や、ピアニカの演奏が人気の遊びであった。制作ではそれぞれが思い思いの制作をしているのだが、その中で、友達に何を作ったのか尋ねたり、人の作っている物を覗き込んでみたりとコミュニケーションがうまれていた。それぞれが勝手に好きなものを作って自分だけで遊ぶというよりも、人の作ったものに合わせて自分も似たようなものを作って、一緒に遊ぶというよう

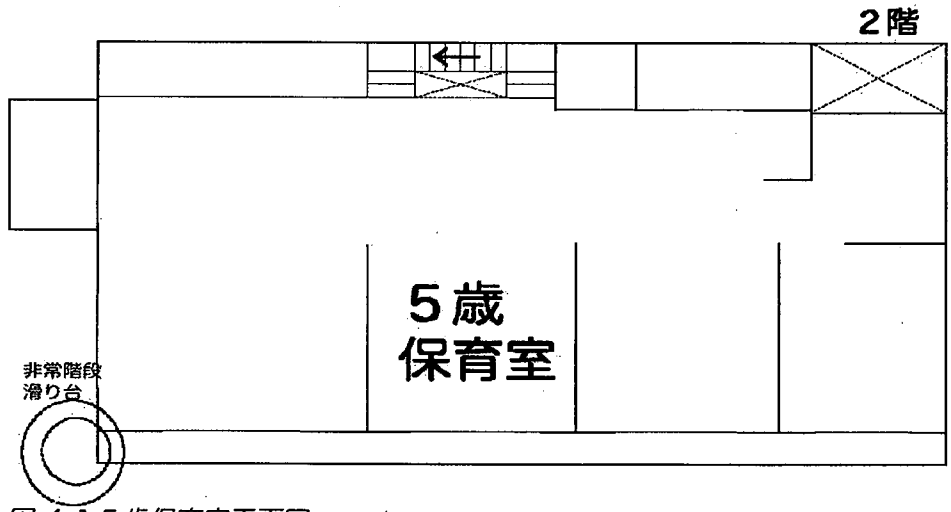


図 4-1:5 歳保育室平面図

写真 4-1:5 歳児保育室。壁で囲われた空間となっている

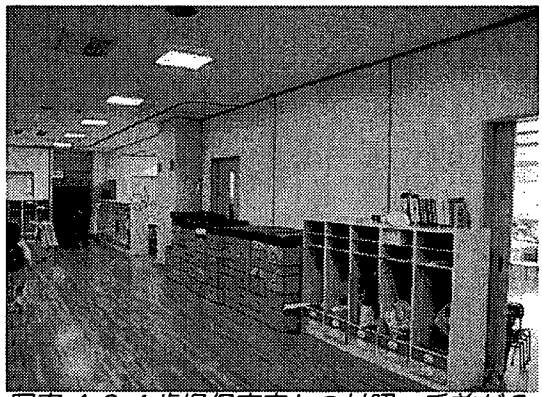


写真 4-2:4 歳児保育室との対照。手前が５歳児保育室

写真 4-3:床座中心の４歳保育室

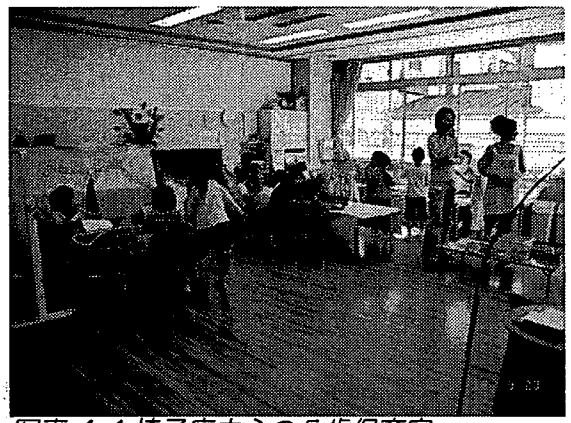


写真 4-4:椅子座中心の５歳保育室

写真 4-5:制作の机と楽器を演奏する机

写真 4-6:非常階段、滑り台を使う

表 4-1:５歳児保育室人数推移表

そら組保育室付近人数推移表（☆：スタッフ、年齢を明記していないものは５歳）

	保育室（人）	５歳児が保育室にいる割合（%）
9：00	8☆	30
9：10	12☆	44
9：25	17☆☆☆	63
9：30	15☆	56
9：40	8☆	30
9：55	2	7
10：00	2	7
10：10	5	19
10：25	5	19
10：30	5☆	19
10：40	22☆	81
10：55	27☆	100
11：00	一斉保育	

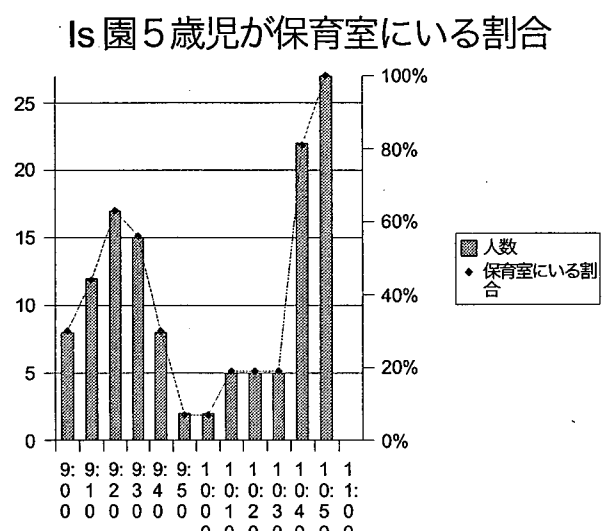


図 4-2:５歳児保育室人数推移

な行動も見られた。この５歳児の保育室には机が２台並べられている。(写真4-5)制作からコミュ ニケーションがうまれていることを考えると、このように制作の場所を広くとることは理にかなって いる。 また、表4-1、図4-2を見ると５歳児も保育室にとどまるのではなく保育室の外で活動しているこ とがわかる。しかし、他の年齢の保育室付近の人数推移表と比べると４歳児はいたるところに出現し ているのに対して、５歳児はほとんど登場しない。これは５歳児が建物の屋内よりも、園庭などの屋外に出ているからである。このことを裏付けるように、５歳児の保育室からは非常階段と滑り台が一緒になっている場所へアクセスしやすくなっている。具体的には、保育室からベランダを通って非常階段や滑り台を使い園庭へ出ることができる。(写真４- ６) このように保育室から建物の外部へアクセスをしやすくすることで、子どもが保育室と屋外を

連続的に捉えることができるようにするなら、子どもの行動を妨げないでむしろ促進していくことができる。

さらに、表4-1から9:25に保育室内の人数のピークをむかえ、9：40を過ぎると保育室の人数が減ってくることがわかる。9：25にピークをむかえていることは、保育所に所属する子どもたちが幼稚園に移動してくる時間が9：15であることで説明できる。さらにその他に次のような行動の特徴から説明できる。

まず登園してきてから30～40分ほどは制作や楽器演奏など、保育室にあるおもちゃやしつらえから発生する遊びが中心であることが観察からわかる。しかし、その時間を過ぎると次第に活動量が増え、建物全体を使うような遊びへと移行していく。そしてその中心となるのは屋外空間を使った遊びである。5歳児が使う保育室として、このような遊び方の移行に対応していけるような環境を備える必要がある。

（2）縦割り保育における環境行動（Mt 幼稚園を事例として）

5歳児の中で保育室にいる5歳児の割合をグラフにした。（図4-3）

5歳児の行動をみると、Mt 幼稚園と Is 幼稚園で大きな差は見られない。（図4-4）遊び方の傾向も似ている。Mt 幼稚園においては登園してきてからまず絵のコーナで絵を描いてから各コーナーへ散らばる。しかしその後、直接屋外のコーナーに行くのではなく制作のコーナーにいっていることがわかる。Mt 幼稚園においても5歳児は登園してから30～40分は保育室内で遊びが発生していたが、Is 幼稚園の5歳児も登園してきてから30～40ほどは屋内のコーナーで過ごしている。（図4-5、4-6）

Mt 幼稚園においては4歳児も屋外空間を屋内から連続している一つの空間と認識していると考えられるが、5歳児になるとその色合いはより濃くなる。制作のコーナーでの制作を終えると、園庭へ出て行く。この時に、4歳児を連れて行ったり3歳児を連れて行ったりすることが見られる。制作のコーナーで作ったものを比べ合っておしゃべりをしながら、園庭に連れ出している。このように異年齢との交流があると5歳児には、自分が年上であるという心理がはたらく。その結果、自分が率先して3歳児や4歳児を連れて行く姿が見られる。このことが、子どもに責任感を生じさせるなど発達に良い影響を与えることは発達心理学で言われている。それで、5歳児が3、4歳児と接することができる空間を提供することが必要である。さらに

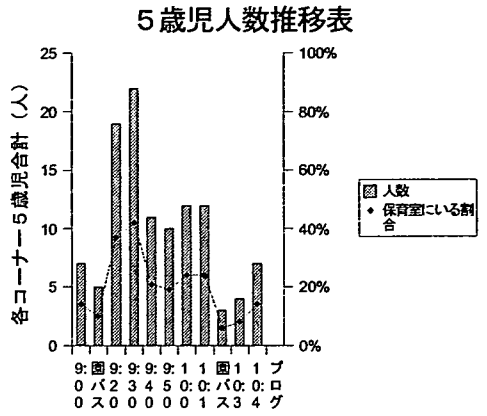


図4－3：5歳児が保育室にいる場合

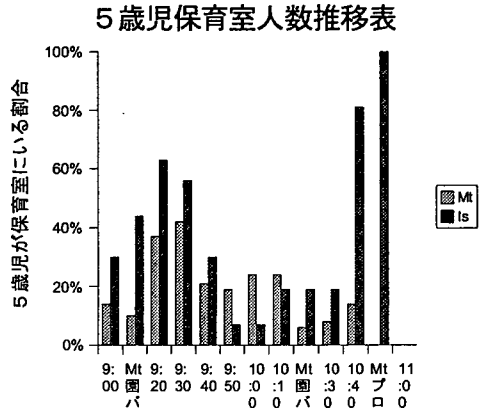


図4－4：Mt幼稚園、Is幼稚園の比較

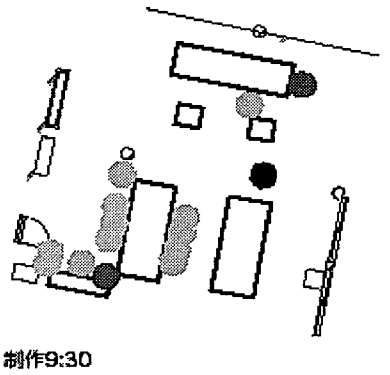


図4－5：制作コーナーで遊ぶ5歳児（青）

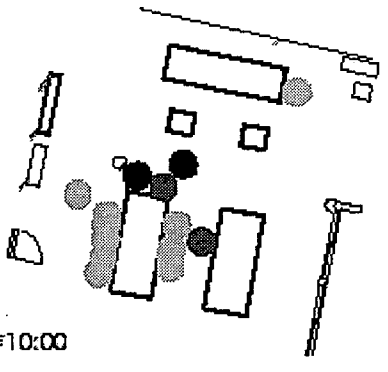


図4－6：制作コーナーで遊ぶ5歳児（青）

屋内において、そのような空間を提供するならば屋内で異年齢との交流がうまれる。そのことにより３、４歳児はすでに屋外空間との連続性という概念を持っている５歳児に連れられて、自分たちも屋外空間を領域の一部と捉えていくことができる。このような概念が発達していくと活動を活発にしていくことになる。(写真４-７)

園庭においては高さの高い遊具や鉄棒で遊んでいた。高さの高い遊具で遊ぶ場合、４歳児は一緒に登ることができることが、３歳児は登らないで下から見ていることが多い。しかし、３歳児は登らなくとも５歳児がお手本を見せることで、学ぶことができる。

C．４保育形態の違いからくる環境の違いがもたらす影響

(１) 年齢別保育と縦割り保育の間での行動の違い

セクション２-１から２-３の中でも言及したように、年齢別保育と縦割り保育では異年齢の交流の多さの点で大きく違いを持っている。両園共に異年齢が交流できる空間は提供されている。Is 幼稚園においてはピロティ部分、ホワイエ部分がそのような空間に挙げられる。Mt 幼稚園においては基本的にどの保育室にも異年齢同士が混在している。そのため、空間の使われ方に違いがあることが考えられる。

図５-１、５-２をみると、共通の空間にいて、かつ異年齢間の活動量の差が影響しないような遊びをしているが、それぞれの年齢同士で遊び、お互いの交流は見られないことがわかる。

原因の一つとしては、４歳児や５歳児が２階の保育室から１階に下がってくる段階ですでに集団（ここでは２人以上の人の集合を集団とする）を形成していることが考えられる。このことにより４歳児は３歳児に声をかける必要性はなくなる。さらに３歳の方から声をかけるという行動は元々あまり見られない。この２点により同じ空間にいても交流が起こっていないと考えられる。また集団を形成せずに一人で下がってきた場合、３歳保育室の前を通らず、自分の保育室から直接園庭に向かっていることが見られた。

それで、これを解決するためには、保育室で異年齢が混ざった集団が形成されることが必要である。

異年齢が混ざった集団が形成されることにより、上の年齢の子どもが下の年齢の子どもを次の活動へと引っ張って行くことができるからである。

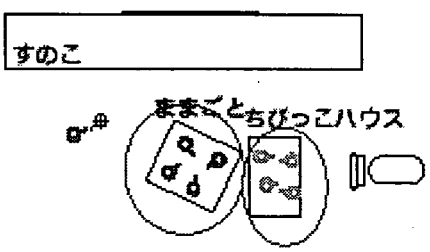
保育室の段階でこのような集団が形成されるためには、上の年齢の子どもが下の年齢の保育室にアクセスできるルートも設定しなければならない。それで、５歳児、４歳児が屋外へ向かう時に、３歳児の保育室の前やその一部を通っていけるような保育室の配置ができると異年齢での交流を活発化させることができる。

ここで３歳児の保育室について一つのことを提案したい。それは、３歳児の保育室を園庭に最も近い場所に配置し、廊下と保育室をしきる壁をなくしてしまうことである。そして４、５歳児の園庭への動線として、自分たちの保育室から直接園庭にアクセスできる動線の他に、３歳児の保育室の前を通る動線を設定することである。

しかしただのオープンな空間だと３歳児は落ち着きを失ってしまうので、そのオープンな空間の中に高さ５００ミリほどの低いパーティションで囲った場所や、机をおいてそのようなしつらえの周りで３歳児が遊びを発生させることができるようにする。デメリットとして暖房効率の悪化や一斉保育時に周りの音が邪魔をして、スタッフの声が届きにくいといったことが挙げられる。しかし、このような空間であれば４歳児や５歳児が３歳児の保育室に立ち寄ることも容易になり、そこで異年齢も含めた遊びを発生させることができるだろう。

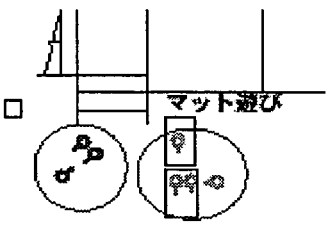
(２) 年齢別保育と縦割り保育の間での行動の共通点

共通点として各年齢の子どもたちの居場所や遊び方をあげることができる。共通点を以下に箇条書きで挙げ



ピロティ10:30

図５－１：Ｉｓ園ピロティ



ホワイエ10:30

図５－２：Ｉｓ園ホワイエ

る。

● ３歳児の居場所として机の周りや囲われた場所などしつらえを中心としてで遊びが発生している。これは園庭など屋外に出た時にもいえる。３歳児同士で屋外にいる時には机や動物の飼育かごの周りなどで遊んでいる。遊びにはおままごとや、何かの役になりきる遊びが見られる。このことから３歳児の生活する保育室を考える際には机を設置したり、囲われた空間を設置することが必要である。また、囲いを自分たちでカスタマイズできるように、囲いを作れる材料を準備する必要がある。

● ４歳児は活動が多く、園内の様々な場所を訪れている。それに伴い、自分たちが遊ぶ領域の概念が基本的な生活の場から広がっている。このことは年齢ごとの保育室を持つ場合、基本的な生活の場を自分の保育室とすると、保育室の外の廊下も自分たちの遊び場として活用する行動からわかる。また年齢ごとの保育室を持たない場合でも、３歳児が多くいるコーナーへ出かけたり、５歳児が多くいるコーナーで遊んだり、同年齢や異年齢と共に園庭に行ったりして自分の遊び場として活用する空間の種類が数種類にわたっていることからわかる。さらに、遊び方においては材料を組み合わせたり形を変えたりして、新たな遊びを作り上げるという行動が見られる。このことから４歳児保育室を考える際には、新たな遊びを作り上げることができるスペ-スとそのきっかけとなる積み木などの材料を準備する必要がある。そして、屋外空間へのアクセスをする際に直接屋外にアクセスできる方法に加えて、屋内の他の箇所を通りながら園庭にアクセスできるようにすると自分の遊びの領域をより広げて行くことができる。

● ５歳児は登園してきてから３０分ほどを屋内での遊びに用い、その後屋外での遊びに移行することが見られる。屋内での遊びの間には、同年齢や異年齢など相手に差はあるものの、コミュニケーションがうまれている。そして、そこでのコミュニケーションを元に次の遊びに移行している。このことから５歳児の保育室を考える際には、制作などができる机やその材料を準備する必要がある。そこで制作や絵を描いたりしながらコミュニケーションをうむことができるへアクセスする動線を屋内を通りながらアクセスできるような動線を設定するならば、異年齢での交流をするきっかけを作ることができる。

C．３　保育施設における安全に関する意識調査

C．３-１．子どもを持っていない男女の保育施設における安全への考え方

問題a-f について。幼稚園と保育園の制度の違いに対して子どもを持っていない人がどの程度理解しているのか明らかにする。

図６-１は問題による理解度の違いを示したグラフである。設立の目的に対する理解度が最も高く、給食の有無に関しての理解度が最も低いという結果がでた。各設問について具体的に知っていると答えた人は３項目、４人しかいない。その３項目の中でも、特に設立の目的の違いについての質問では３人が具体的に知っていると答えた。表６-１によると、設問全体の最瀕値は１、平均値は1.52 という結果が出ている。さらに最も理解度が高かった設問の平均値と低かった設問の平均値の間でｔ検定を行ったところ、有意な差は見られないことがわかった。このことは、子どもを持たない人の幼稚園や保育園の制度についての理解度が全体的に低い事を示している。

図６-２よりどの程度の事故までなら許容するのかについて考える事ができる。数値が高い程、子どもがケガを体験する事に賛成である事を示している。図６-３から子どもが自分で危険を学び、体得するために小さな事故を起こす事が必要だという考え方に対しての賛否の度合いを見ることができる。

全体の94%がこの考え方に賛成である事がわかる。表６-２を見ると、園 内でも住宅内でも許容できる事故の度合いはあまり変わらないことが伺える。

相関を考えると、園内での事故に対する考え方と事故体験への考え方の相関は0.27、住宅内での事故に対する考え方と事故体験への考え方の相関は-0.31 となり、双方とも弱い相関しか認められない。

これは、サンプルデータの中に、許容できる事故が

表６－１：制度に対する理解

管轄省庁	1.63
設立の目的	1.81
年齢	1.63
預かる時間の長さ	1.69
長期休暇の有無	1.31
給食の有無	1.06

小さな事故であり、かつ事故に対する考え方に反対というデータが無いためと思われる。この結果だけからは、園内や住宅でどの程度のケガを許容するかという事に関わらず、子どもは小さな事故を経験した方が良いと多くの人が考えている事を読み取る事ができる。

表６-３の園を決める優先順位についての結果をみると、園の安全性をトップに挙げた人は４人であった。他にトップに挙げられていたものは園の教育（保育）方針とアクセスのしやすさでいずれも６人であった。しかし、２位までに安全性を挙げた人は１０人なっており、安全性は園の選定基準の上位にランクインしている事がわかる。このアンケートの結果から、２０代の多くが子どもを持ちたいという希望は持っているものの、子どもが通うであろう幼稚園や保育園の制度に関してはあまり理解をしていないという実態が明らかになった。安全意識については、子どもたちが自分で危険を学んでいくためにある程度の危険は許容できるという意見が多い一方、園の選定基準の上位に半数以上の人が安全性を選択している。このことから安全に対しては高い意識を持っていることがわかる。

C. 3-2　子どもを持っている親への保育施設における安全への考え方

名前　子どもの年齢　性別

Ｔさん　２歳　女の子

Ｓさん　３歳　男の子

　　１０歳　女の子

Ｈさん　６歳　男の子

　　３歳　女の子

Ｋさん　５歳　男の子

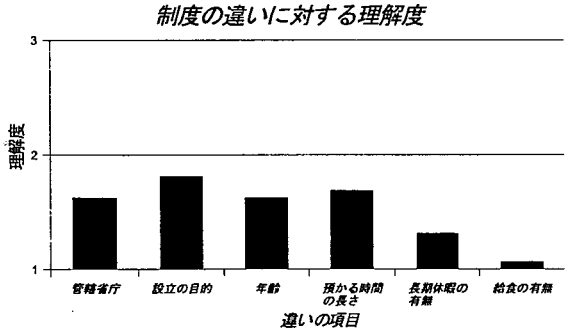


図６－１：制度に対する理解

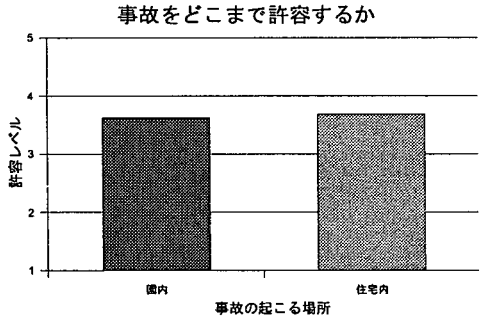


図６－２：事故をどこまで許容するのか

表６－３：幼稚園の遊び方

園の安全性の順位				
一位	二位	三位	それ以外	凡例
5,1,2,4.3	1,5,2,4,3	2,1,5,4,3	2,1,3,4,5	1.教育（保育）方針
5,1,2,4,3	1,5,2,3,4	2,1,5,3,4	1,2,4,5,3	2.アクセスのしやすさ
5,1,2,4,3	1,5,2,4,3	2,1,5,3,4	2,3,4,5,1	3.友達が通っている
5,2,4,3,1	2,5,1,4,3	—	—	4.兄弟が通っている
—	1,5,2,4,3	—	—	5.安全性
—	1,5,2,3,4	—	—	

小さな事故を起こす事が必要という考え方への意見

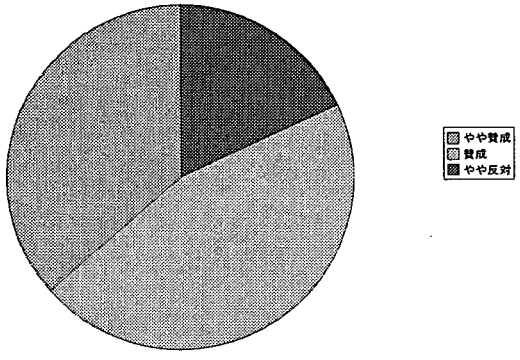


図６－３：事故をどこまで許容するのか

表６－２：事故の起こる場所の違いと考え方の違い

小さな事故を起こす事が必要という意見への考え方

	average(園内)	stdev(園内)	mode(園内)
園内	3.63	0.81	4
	average(住宅)	stdev(住宅)	mode(住宅)
住宅	3.69	1.01	3

3歳　男の子

設問1（園の選定規準について）

凡例：1園の教育方針。
2アクセスのしやすさ。
3友達が通っていること。
4兄弟が通っていること。
5園の環境の安全性。

回答

T. 1→2→5→3→4

最上位には園の教育保方針がきている。園の環境の安全性は3番目に挙げられており、友達や兄弟が通っていることよりは優先されるいるが、アクセスの良さの方が優先されている。

S. 1→4→2→5→3

最上位には園の教育方針がきている。兄弟が通っていることが2番目に挙げられているが、これは実際に兄弟がいるため、一度通ったことのある園の方が勝手が分かり通わせやすいという見方があるからであろう。園の安全性は最後から2番目に挙げられている。

H. 1→5→2→3→4

最上位には園の教育がきている。2番目に園の安全性があげられており、アクセスのしやすさよりも上位に置いている。この人は安全性に関して高い意識を持っていることが伺える。H さんは6歳と3歳の2人の子どもを持っている。まだいたずら好きの年ごろなので、特に安全性に目がむいたと考えられる。

K. 5→1→2→4→3

安全性を最上位に置いている。2番目に教育方針をおいており、次にアクセスのしやすさがきている。Kさんも5歳と3歳の子どもを持っており、2人とも男の子であるため普段からやんちゃな行動を目にしているのだろう。そのため安全性を一番に重要視したと理解できる。

設問1について

全体を通して4人中3人が園の教育方針を一番に挙げている。これは順当な結果と考えることができる。幼稚園、保育園といった施設に毎日通わせる以上、そこでなされる教育や保育の方針を一番に考えるのは当然である。安全性に関してはそれぞれ考え方が違うようである。これにはそれぞれの子どもの活動レベルの違いが影響していると考えられる。幼稚園や保育園では最低限の安全性は確保されていて当たり前という考え方もあるようだ。

設問2、3（園内（設問2）、住宅内（設問3）で許容できるケガの程度）

凡例

1. 血がにじむ程度。 ex) 擦り傷、かすり傷
2. 薄くあざができる程度。ex) 打ち身
3. 血が流れる程度。ex) 切り傷
4. 骨折や脱臼。

並べ替えて、これ以上の事故は環境面で何らかの対策が必要と考えられる数字の前に / をいれる。

回答

T.　園内 1→2→3→/ 4
住宅内 1→2→3→/ 4
S.　園内 1→2→/ 3→4
住宅内 1→2→/ 3→4
H.　園内 1→2→3→/ 4
住宅内　1→2→3→/ 4
K.　園内 2→1→3→/ 4
住宅内 2→1→3→/ 4

設問2，3について

4人中3人は骨折や脱臼などのケガをしなければケガは仕方ないという考えを持っている。親はどの程度の事故なら許容できるかの一つの線引きはこの辺であることが伺える。口頭で簡単に尋ねたところ、どの親も血が切り傷などで血が流れ出ることに対しては、血の流れ具合によるができれば避けたいと考えていることがわかった。また園内と住宅内で許容できる事故のレベルは変わらず、親は子どもがどこで事故を起こすかということよりも、どんな事故を起こすかという問題のほうを気にかけていることが理解できる。

設問4

回答

全員が集合住宅の2階以上部分。または、2階建て以上の一戸建。

設問5，6，7（現在の住宅内に危険を感じる場所があるか）

回答

T.　ある

大きな事故につながる可能性があるのでいつか改善して欲しい。

S.　無い

H.　ある

大きな事故につながる可能性があるのですぐに改善して欲しい。

K.　無い

設問4，5，6，7について

現在の住宅内で危険を感じる箇所についてはすぐに改善して欲しいと、いつか改善して欲しいとの間で意見が分かれているが、改善したい理由としては大きな事故につながる可能性があるからということで一致している。ここで多少の危険があったほうが子どもの遊びが促進されると考えた人はいない。この設問に回答した２人の回答を比べると、設問３の回答は同じである。このことから、大きな事故とは骨折や脱臼を伴うような事故と考えていることがわかる。

設問８，９（小さな事故により危険を体得していくという考え方に対して）

回答

T. やや反対

幼稚園などではどんな小さなものであっても預かっている責任がある以上、危険は避けなければならないから反対。

S. やや賛成

幼稚園などでは危険な事は危険とまず教える事が重要。でも、教えたからといって100％そうできる訳ではないので、ある程度のケガは仕方ない。

ex)『ブランコに乗っている時に手を離してはいけないよ』と教える。でも、何かに気をとられて手を離してブランコから落ちる時もある。ケガもする。一度痛い思いをするとそれが記憶に残っている間はしっかりつかまっているし、時々『危なかった』ことを思い出させるともうやらなくなる。

H. やや賛成

小さな危険であれば子どもたちは自分たちで学び、クリアしていくから賛成。

K. やや賛成

小さな危険であれば子どもたちは自分たちで学び、クリアしていくから賛成。

設問８，９について

小さな事故を起こすことにより危険を体得していくことについてはどの親も大賛成という訳ではなかった。しかしＳさんの意見はこの考えの本質に近いものである。このことは親の中にも事故を体得することについて肯定的な考え方をしている人がいることを示している。

設問１０（幼稚園・保育園のイメージ）

回答

T.（一部ではあるが）親が親としての責任から逃れて自分のための時間を作り出すところ。集団生活に慣れさせるところ。

S. 親にとっては、子育ての情報交換の場であり、自分の子どもを客観的に見ることができる。同じ年齢でもひとりひとり性格や能力が違っているので面白いし参考になる。子どもは集団のルールを学び『私中心』の世界から『集団の中の私』という概念を感じとってくれるところ。また、子どもの興味を広げ、能力を伸ばし、自信を持たせる事ができる。

H. 友達とのコミュニケーション（ケンカを含め）、子ども同士のルールや社会性を身に付けられるところ。(以下望むところとして）男の子だったら家でできないような遊びをたくさんさせて欲しい。女の子は少々厳しくても女の子らしく、そして遊びを通していろいろなことを教えて欲しい。小さくても男の子と女の子に求めるところは違う。

K. 家でできない行事などをしてくれるところ。

設問１０について

回答

幼稚園・保育所に対して共通している意見は、子どもが社会性を身に付ける場であることである。性別により保育の仕方に求めるところが違うという意見は興味深い。これにはジェンダーの問題が関わってきてしまうので、園で保育の仕方を別にすることは難しいだろう。園のスタッフの価値観で男性として・女性としてを教えることは危険である。しかし、この先女性としてあるいは男性として生きていくに当たってそれぞれの仕方で、互いを敬い、大切にするという本質的なことを伝えることはできるかもしれない。現実にそのような保育をしていくのなら、男性のスタッフが園に一人は必ずいることが望まれるところではある。

次に挙げられる点として、親のための幼稚園・保育所ということも見えてくる。親が自分の子ども以外の子どもを見ることにより子育ての参考にしたり、親同士の情報交換をしたりする場として期待されている。しかしこれは行き過ぎると、親同士の間に競争心を煽ることにもつながる。このことから、親同士がこのような情報交換をするための場を空間として提供すると共に、その場で親同士の間で問題が生じないように仲裁するような役割の人を置くこともできるだろう。

また育児から解かれて親の時間を持てるという意見もある。育児ストレスという言葉に代表されるように、特に昨今、親の側にもストレスがかかってきている。親のための空間を設けることにより親も社会が広がり、コミュニティを構築することができる。しかし、この親のコミュニティが子どもを殺害する事件に発展した